

市長の伊賀じまん

—伊賀は都人の浪漫の地—



今回は、中世の伊賀の文学や人の交流についてお話ししたいと思います。

天正9(1581)年の天正伊賀の乱で伊賀は焦土と化したという大きな出来事があり、私たちはそれ以前の歴史を忘れてしまっているのかもしれませんが、しかし、中世の伊賀では文化的に着目すべき、人の交流があり、伊賀は都人にとって憧れの地だったのではないかと思います。

伊賀線に乗って、市部駅まで行くと、田んぼの中にこんもりとした森があります。この森は垂園森たれそのもりといって、清少納言の『枕草子』に日本の代表的な美しい森のひとつとして記載されています。垂園森は歌枕として、その時代の人々からは歌を詠むには浪漫をかき立てられるところだったようです。

また、種生には草蒿寺跡そうこうじという兼好法師ゆかりの地があります。この時代、和歌が上手だった四天王と呼ばれる人たちがいました。そのうちの2人が伊賀に住んだという伝説が残っていて、1人は兼好法

▼垂園森



▲種生にある草蒿寺跡の石碑

師で、もう1人は頓阿とんあという人です。

頓阿には、伊賀で『十楽庵記』という書物を書いたという伝説があります。四天王と親しかった僧侶が長田の射手神社にあったお寺に居て、頓阿は彼と交友があったことから伊賀に来たと言われており、伊賀は都人にとって、とても魅力があったのだらうと思います。

江戸時代になると、種生の常楽寺に京都の学者が兼好法師を描いた掛け軸などを寄進しました。そんなことから江戸時代になって、また伊賀は文学を育む、とても素晴らしいところだという憧れが広がったようです。

伊賀はいろいろな人が往来し、交流したところで、文化度の高い地域だったようです。伊賀は現在の日本文化の柱の1つとなり、日本文化のゆりかごとなった地であったと思うのです。

伊賀の文化は誇るべきもの。そして、その伝統を大事にしていく務めが私たちにはあるのだらうと思います。(伊賀市長 岡本 栄)

伊賀市の文化財 107

国指定名勝及び史跡・県指定史跡
城之越遺跡(比土)

城之越遺跡は、木津川右岸の丘陵付近の平地に広がる遺跡です。この遺跡を代表する遺構(昔の人々が残した痕跡)として大溝おほみぞが上げられます。これは、平成3年(1991)の発掘調査によって見つかった古墳時代前期のもので、大溝は、3カ所の井泉(穴を掘って水を湧き出させた場所)の水を源流とした3本の流路からなり、これらの流路がひとつに合流して下流へと伸びています。合流点までの溝斜面の多くに石が貼りつけてあり、合流点には立石や溝に降りるための階段状の石組みが配置されています。

また、それぞれの流路からは、土器や木製品が多量に出土しました。それらの土器は土師器(素焼きの器)の小型壺と高杯(器に脚を付けたもの)が大半を占め、壺の中には下部に穴を開けたものも見られます。出土した木製品は、剣形や案といった祭儀用のものが含まれますが、他の遺跡で多く出土する木製農耕具は大溝では見られません。このような出土遺物の内容などから、溝周辺において祭祀が執り行われ、その道具が溝に廃棄されたものと考えられます。

一方、大溝の石貼りや立石は、後

の庭園につながる造形美と技術を示すとされています。また、この大溝を西に望む場所に建物跡が2棟見つかっていて、大溝の祭祀にかかわる祭儀用の建物とも推定されます。

城之越遺跡は平成4年(1992)に三重県の史跡に指定されましたが、さらに、大溝の部分については平成5年(1993)に国の名勝及び史跡に指定されました。現在、城之越遺跡は歴史公園として整備され、特に大溝は国内では珍しい貼り石や立石など本物の遺構を整備し、現地に露出して展示をおこなっています。また、城之越遺跡学習館では、出土遺物の展示もおこなっていますのでぜひ実物をご覧ください。



▲大溝の実物展示

文化財課
☎ 47・1285
FAX 47・1290